



「いい格好だな、お嬢様。さあ、お楽しみと
いこうじゃねえか」

「触らないで! この外道っ!」

「もっと大声で助けを呼んでもいいんだぜ?」

「こんな地下じゃ、どこにも聞こえないけどな」

「命知らずね……こんな真似をして無事で済むと
思ってるの?」

「その強気がいつまで持つか楽しみだ。そでら、
入れるぜ。レッドのマ○コはどんな具合かな?」

「やめっ……」



「くっ……うっ……っ……」

「きつついな。ん？ 血が出てんな。ひよっとして処女だったか？」

「なっ……!!」

「頑張って痛いのが我慢してたんだな。

かわいいじゃねえか」

「馬鹿にしないでっ……。この程度何とも……」

「そうか、だったら激しくいくぜ」

ズ
グ
グ
グ
カ
ツ



「ぐっ、うっ……はぁっ、くっ……」

「あゝ、締め付けすぎえ……
やっぱケモノといえれば後背位だよな」

「ふっ、うあっ、あっ、んぐっ……んぐっ」

「声漏れてんぞ、おらっ、おらっ……」

「あぁっ……んっ……んっ……はっ」

「うっ……そろそろ一発目イケぞ
このまま膣内に射精すからな」
「い……いっ……やめてッ……」





「ぐおおっ……」

「んんっ……く……」

「くっ……搾り取られるっ……」

「あっ……いっ……」

ビュルルッ

ムッ
グッ
ツッ

ビュッ

ビュッ

ムッ

グッ
ツッ

ムッ

ムッ

ムッ
グッ
ツッ

グッ
ツッ



「はあ、はあ……たまんねえ」
「くっ、うっ……こんな屈辱……」
「まだまだこれからだぞ。」
「何回でも臆内に出してやるからな」
「負けない……私はこんなことで折れたりしない……」

ビィッ
ビィッ



— 時間後 —

「まだキツイが、だいぶ馴染んできたな」

「ああ、んっ、くっ、うぐっ」

「いいせえ。吸いつきといて締めつけといて、中々の名器だ」



「うっ、ぐっ、んあっ、あっ」

「声押さえられなくなってるんじゃないか。ほら、もっと鳴いてみろよ」

「はあっ……くっ……言っただけじゃ。」「んなのっ、んっ……何ともないって」



「くっ、またイキそつだ。射精^だすぞー！」
「ま、まさかっ、またっ、中^にっ」
「当然だろ、一番奥で出してやるからな」
「駄目っ！...もう中はっ！...」

「おらっ、おらっ...どっだっ...」
「あうっ！...あう、んぐっ！...うっ、くっ！...」
（奥まで入ってきてっ......駄目っ...！...これ以上は...もう...っ）

「射精^でるっ!」
「いやッ……ああっ!」



「暴れても無駄だぜ。おらっ! 子宮で飲みこめ!」
「あッ、ああっ! 嫌ッ!」
「もう何発も出してんだから今更変わらねえよ。大人しく孕んじまいな」
(いやっ……こんな男の子供なんて……)

「ふいー、出した出した」

「はあっ…はあっ…くっくっ…」

「ほんと最高のマ○コだな。何回出しても飽きねえよ」



「殺す……絶対に、殺すっ……」

「相変わらず気丈な女だな…まあ、妊娠でもすりゃ大人しくなるだろ。」

「これから毎日じっくり可愛がつてやるよ」

（私は絶対に折れない……必ず、必ず「いつを……」）



